

《後記》

今回は、春日先生のお話を伺える貴重な機会であったが、何より一同が感心したのは、喜寿を越えてなお少しも変わらない先生の学問的洞察の確かさであり、思索の深さであった。対して、我々は地理学の「現在」に関わる身でありながら雑務に追われるままに日々を過ごし、地理学が学問としてどのような変容を遂げてきたのか、今後どのような道をたどるべきなのか、といった問題を改めて考える機会も減りつつあるのが実状である。20世紀後半の地理学を省みた先生のお話には、21世紀の地理学を担わねばならない我々への宿題が多く含まれていた。「世紀のはざま」で、先生からのバトンをうまく受け取ることができたかどうか。それはかなり心許ないというのが正直な気持ちである。冒頭でも記したように本冊子は、そもそも当日の記念品として春日先生に贈呈すべく企画されたものであるが、結果的には、我々が先生からの宿題を繰り返し確認する記録となった。

身勝手な願いかも知れないが、春日先生には次世紀も変わりなく我々を叱咤激励して頂きたいと思っている。学問に終着点はなく、また学者に引退の文字は無いことを、先生ご自身の姿から学ばせて頂いてきたのであるから。

ところで、テープ起こしの段階で、講演の最後10分間の録音に不手際が生じていることが判明した。録音を依頼しておいた貸し会議室側のミスではあったが、さりとてどうしようもなく、思案したあげくに、先生に再度お願いしその部分を再録させていただくこととなった。先生には大変なご迷惑をおかけする結果となり心苦しかったが、この非常識な依頼を快くお引き受け下さった。再録当日は大雨の月曜日であったが、阪急豊中駅前にあるアイボリーホテルの喫茶ラウンジで待ち合わせて、先生から当日の話を思い出しながら「補講」をして頂けたのは編集担当としての役得であった。講演記録部分の「地理学の性格に関して」(11頁)という小見出しから後の部分が再録部分である。さらに、テープ起こしをした全体の原稿にもお目通しいただき、文章の整理と補足(加筆修正)まで行って頂いた。先生には、かなりのお手間をお掛けしたが、それにより記録の不備が補われ完成度が高まった。先生のご配慮に心から感謝申し上げます。

なお、末筆になりましたが、編集担当の怠慢から本冊子の発行が大幅に遅れたことを伏してお詫び申し上げます。

(2000年12月 編集担当:川端)